

山田和樹

「スイスの名門オーケストラで
新たな地平に挑む」



スイス・ロマンダ管弦楽団 首席客演指揮者に就任予定

二〇一二年九月にスイス・ロマンダ管弦楽団の首席客演指揮者に就任が決定しています。大きな肩書をいただき、いま身が引き締まる思いでいるところです。昨年の六月十日、急な代役を一週間前に打診され、スイス・ロマンダ管弦楽団で指揮をすることになりました。それがちょうど次期音楽監督を探している時期であつたようで、その演奏会の一週間後、家族に「将来、スイス・ロマンダ管弦楽団の音楽監督などできたら夢のようだね」と話していたら、その直後に音楽監督の就任を打診する電話があつたのです。

しかし、音楽監督は楽団のオーガナイズや、経営的なことなどもしなければなりません。僕は楽団の本拠地、ジュネーブで主に話されるフランス語も堪能ではありませんし、時期尚早ということで音楽監督はお断りしたのです。ところが、わざわざ首席客演指揮者というポストをつくってまで迎え入れてくださいました。スイス・ロマンダ管弦楽団の音楽監督はネーメ・ヤルヴィ先生という八〇歳を超えた大ベテランの方ですから、ゲストの僕が若い指揮者でちょうどよいバランスになったかもしれません。

「横浜シンフォニエッタ」と ブザンソン国際指揮者コンクール

学生時代は忙しかったという印象しか残っていません。勉強だけでなく、アマチュアオーケストラの指揮、オペラのアシスタントなど、いろいろな仕事も並行しておこなっていました。学部四年生のときは一日の睡眠時間が二、三時間、食事もうるくにとらない状態で、上野のキャンパスをいつも走っていましたね(笑)

藝大在学中に結成した「横浜シンフォニエッタ」は、じつは藝大に代表されるアカデミズムに対する反発から生まれたものです。芸術表現には心が自由であることが求められますが、特定の型やセオリーを押し付けられると両者の間で板挟みになってしまふ。そういう気持ちのわだかまりから自分でオーケストラをつくることにしたのです。

いざ始めてみると、意外と僕の考えに賛同してくれる人がいて、多くの藝大生が集まり、ベートーベンの交響曲を、全曲曲順に演奏するなどということをしていました。当時は練習のための部屋を借りる手続がとて



左：演奏中の山田和樹氏
右：山田和樹 & 横浜シンフォニエッタ
「モーツァルト《交響曲第41番「ジュピター」》、ビゼー《交響曲》」

も大変で、仕方がなく廊下に立って練習をしたこともありました。

じつは、僕はコンクールにあまりよい思い出がないのです。日本でコンクールに応募しても、第一次審査の書類選考とビデオ選考で落選してしまう。「ブザンソン国際指揮者コンクール」のよいところは、第一次選考から実際に指揮の実技を見てくれるところです。予選は世界数か国でおこなわれ、課題曲を指揮して、リハーサルをおこなうという審査です。二〇〇七年(第五十回)の一次審査はロシアのサンクトペテルブルクで受け(このときは二次審査で落選)、二〇〇九年(第五一回)にはドイツのベルリンで受け、この二度目のトライで優勝し、併せて聴衆賞もいただきました。ブザンソンは指揮者の雰囲気まで含めて判断してくれるコンクールで、僕はこのコンクール以外での優勝は難しかったと思います。

ところで、優勝したことはとてもうれしかったものの、喜んでいられたのはほんの三十分ほどでした。優勝者は翌日にはスイスへ行き演奏会をおこなうよう、スケジュールが組まれているのです。コンクールのプレッシャーもすごかったですが、「お披露目演奏会」で、またさらにすごいプレッシャーをかけられるというわけです。

若いときは貪欲に取り組み行動してほしい

ハンタリー精神や、貪欲さが必要だと思うのです、音楽には。僕がまだに覚えているのは、藝大の入学式の挨拶で当時の澄川学長が、「皆さん、おめでとうございます。いまここにおよそ二五〇人の新入生がいますけれど、この中で残れるのはたった一人だけです」というようなお話をされたのです。芸術の世界では、二四九人はその一人を支えるためにいる、ということ話をされた。まだ入学したばかりの学生に対して「厳しい世界だから肝に銘じておきなさい」ということだと思うのですが、いまでも大変印象に残っています。

僕が「横浜シンフォニエッタ」を結成したときはまだ学生でしたから、知識も経験もなく、それほど指揮がうまいわけでもなかった。しかし、音楽が好きという気持ちは人一倍強かったですし、絶対に音楽をやりたい、指揮者になりたいという強い意志を持っていました。当時は、「悩むくらいならオーケストラをつくってしまえ」というように勢いに任せて行動していました。お蔭で演奏会をおこなうことがどれだけ大変かということもわかったのです。

僕もまだ若いですが、十代や二十代のプロを目指す皆さんには、とにかく貪欲に行動してほしいです。若いときは体力があり、寝なくても平

気です。僕は二十代におこなったことに全く悔いはないです。よく遊び、よく学び、よく音楽をし、しかも友人にも恵まれました。澄川学長がおっしゃったように、芸術家は支えてくれる人がいるからこそで、自分の才能だけでは絶対にやってはいけません。格好などつけずに、とにかくがむしやに、おこないたいと思ったことをすぐ行動に移してほしいと思います。



やまだ・かずき

1979年、神奈川県生まれ。東京藝術大学音楽学部指揮科卒業。指揮法を松尾葉子・小林研一郎の両氏に師事。2009年、第51回ブザンソン国際指揮者コンクールに優勝、併せて聴衆賞も獲得。ただちにモントルー＝ヴェヴェイ音楽祭にてBBC交響楽団を指揮してヨーロッパデビュー。同年、ミシェル・ブラッソンの代役でバリ管弦楽団を指揮、再演が決定する。これまでに、サイトウキネンオーケストラをはじめ、日本国内主要オーケストラ、BBC交響楽団、BBCナショナル・ウェールズ管弦楽団、バリ管弦楽団、ルーアン歌劇場管弦楽団、スイス・ロマン管弦楽団、ベルリン放送交響楽団、サンクトペテルブルグ交響楽団、ウラルフィルハーモニー管弦楽団などへ客演。現在、NHK交響楽団副指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢ミュージック・パートナー、横浜シンフォニエッタ音楽監督、東京混声合唱団レジデンシャル・コンダクター。ローム・ミュージック・ファンデーション在外音楽研究生としてベルリンに在住。2012/13シーズンより、スイス・ロマン管弦楽団首席客演指揮者に就任予定。